

柏木教会月報

3月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 www.church.ne.jp/kashiwagi/

信仰から信仰へ——信仰とは、希望である

ヘブライ人への手紙——第一章——一六節

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。（一節）

伝道師 大石周平

「信仰」とは何か。ヘブライ書は、そう問い合わせながら人類の歴史のはじまりに思いをいたす。歴史のはじまりとはどこか。アダムとエバか。本書も、創造の日を思うことから始めていよう（三節）。だが、最初に名指しされるのは「人類史上の殉教の初穂」と呼ばれたアベルである（四節）。私たちは信仰のはじめに、同時に死を目の当たりにしなければならない。ああ、人類史は兄弟殺しの罪に始まつた。確かにそうだ、「歴史は、カインよ、アベルは何處におるや」という問い合わせで開かれた。歴史はまた「アベルよ、カインは何處におるや」という問い合わせが与えられるまでは閉じられない」（ナイルズ。創四・九及び一コリ一五・五五参照）。信仰のはじめは、罪の終わりを望む血の叫びのはじめでもあったのである。

さて、人類は一つの家を除き絶えてしまつたことがあつた。ノアの洪水物語に記された出来事だ。初めに、罪の終結のために世の終わりを告げねばならぬ悲しみの神がおられる。しかし次第に、この世に信仰の余地を残すことが御心だと示される。聖書は、新たな歴史のはじまりを一人の義人の「信仰によって」のものと見る。ノアには、望み

得ないときに恐れかしこみ主に信頼する忠実な信仰があつた。物語の末にノアの上に置かれた「虹」は、見えない神に依り頼んだ信仰を義とする御心を見させ、命の与え主なる神の憐れみを思い知らせた。罪に対する裁きの大水の激流にも関わらず、信仰の義は残された。罪の死は同時に歴史の終わりでなければならなかつたが、しかし、その時にかえつて「信仰によって」神の憐れみの現実を知る者の歩みがはじまつたのである。

この約束を受け継ぐ者がアブラハムだった。彼はイスラエル民族史の出発点に立つ「信仰の父」であり、契約は彼において明白に民のものとなる。彼がまだ見ぬ約束の地へ歩みはじめたとき族長時代が開始したが、それは、私たちが「救済史」と呼ぶ歴史的具体的なはじめでもあつた。だが、どういうわけだろう、彼もその子も神の約束に従い望んでいた土地を所有せずに死ぬ。やはり、信仰者も望み空しく死ぬばかりなのか！いや、彼らが地上で彷徨える羊のようだつたことが、かえつてヘブル書の著者には、天の牧者の新たな支配の現実を思わせる。彼は、父祖たちが信仰によって、生きるにも死ぬにも「約束」から離れなかつたことを指摘する。彼らが命絶えるとき、信仰も希望も絶えただろうか。否、否、否だ！

ヘブライ書によれば、信仰とは希望である。アベルの血は、キリストの仲保の血によつて贖われる。ノアや父祖たちの信仰は、この眞の大牧者によつて実現する神の国を指差すものだ。私たちはこの歴史にどう身を置くべきか。何がこれから的新たな歩みを方向付けるのだろうか。信仰から、信仰によって、信仰へ！これが聖書の歴史の語る答えに他ならない。